

私が専門とするのはアフリカ大陸の中でサハラ砂漠の南に位置する地域、つまりいわゆる「アフリカ」の歴史である。長い間文字が用いられてこなかったこの地域の歴史や文化を研究する際には、文字無しでどのように知識が伝達されてきたのかという問題は重要なテーマの一つとなっている。

この問題を解説する際にはしばしば引き合いに出されるのが、古代ギリシャの哲学者プラトンの著作『パイドロス』である。プラトンは知識の伝達と文字の関係について概ね次のように記している。文字で書かれたものは、質問された際に返答することはなく、誤って扱われたり不当な非難を受けたりした際に自らを弁護することができない。またその内容を授けるのにわざわざくれない人物に対して沈黙を貫くこともない。したがって「正しくことば、美しくことば、善くことば」と

## No.310

## プラトンの知恵

と」について知識を持つている人は納得がいくまで真実を教えようとすると時には文字を用いない。

文字で書かれたものを知識伝達の手段として最も重視し、また文字の恩恵によって生み出された数々の技術に支えられて生きる私たちにとつて、このよつな文字に対する



石川 博樹

批判は意表を突かれるものである。しかし知識を伝える際に、相手がそれを受け取るのにふさわしい人物であるかを吟味した上で、疑問や批判に対しては適切に返答し、また真意が伝わるように十分な説明を行うべきであるという考え方は言われてみれば至って

正論である。

文字を用いずに知識を伝達していた時代の人々が生み出したこのような知恵を、文字がしるにするようになった。もし人々がこの知恵を胸に刻んで知識の授受を行っていたならば、現在のよつに多くの国々が核兵器を開発し、他国を恫喝するよつなことはなかったであろう。核兵器とまでいかなくとも、私たちが抱える数多くの問題の中には、知識を伝える側と授かる側が各々の責任を全うしていないために生じたものが多いように思われる。言つて易く行なうに難いことであるが、知識としてそれが生み出した技術を利用して伝える際には、各人が相応の責任を負つことを思い起こす必要があるのではなからうか。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教)